

連続講座〔2〕

「なぜ、東洋医学は必要とされるのか？」

徳永阿里（阿里鍼灸治療所）

専門分化は進んでも 全体のつながりは見えてこない



西洋医学では、はじめに人体を解剖学的「部分」に分割・振り分けて、それぞれの専門分野で、その病気（異常）の内容を分析し、原因を突き止めようとします。これは、制度として「病名」に対する「これこれの治療」という枠が設定されていて、大方がこの原則に基づいて治療されるのですから、一見、合理的で医療保険制度にかなっていると言えます。また、どの病院に行ってもだいたい同じような治療が受けられるのもこのためです。

ところが、人の生体はその外見に比べて、ずっと複雑・綿密に形成されていて、肩こり、腰痛などを例に挙げても、その原因は一様ではない訳です。症状の出方や経過は色々であり、一括して処置できるほど単純ではありません。

例えば、西洋医学の分類（解剖）に従えば、人体は大きく分類して「神経・脳神経系、呼吸・循環器系、消化器系、内分泌系、筋・骨格系・・・」などから形成されているということです。

問題はそれぞれの系列ごとにその機能や仕組み、更に症状まで細密に解明されてきていると言っても、では、或る系列が他の系列とどのようにして密接に関連し、その上で全体として「では、どうなのか？」ということになると、専門分化が進めば進むほど、逆にそれは釈然としないものになっているのではないかという疑問が生じてきます。

病変や異常値に主眼を置く西洋医学

東洋医学では解剖学的な系という捉え方はしませんが、仮に系という見方をしたとすると、東洋医学では消化器系と筋・骨格系は密接に関連していて、両者を切り離しては考えられない、ということになります。

一方、西洋医学では消化器系と筋・骨格系がなぜ密接なのか説明できませんし、その必要も感じないのが現実です。消化器系の症状を治療するのに、消化器系以外の系列を刺激

したり、利用したりすることは西洋医学ではありえないからです。消化器系の症状はどこまでも消化器系のものであり、投薬もその他の治療も直接それに対してなされます。

このような西洋医学の立場からすると、ひとつの系列が他の全ての系列と密接に関わっていることなど関係なく、治療の主眼となる標的はあくまで症状をきたしている組織（部分）そのものとなります。

組織の変性 = 変化が画像ではっきりと認められる場合は、こうした西洋医学の見方（診断法）は、威力を発揮します。画像以外でも多種多様な数値（尺度）を基準に正常か否かを突き止め、異常な数値が認められた時は、画像と同じく正常値になるまであれこれ治療が施されます。このように、人体の内部に探りを入れて解明するという西洋医学の手法は、画像・数値を最大限に活用して病気に対処するものです。

そうすると、各系列ごとの縦・横のつながりや全体との関連などは、軽視されることになってしまうのも当然です。

症状があるのに

画像・数値には異常なし？

では、画像や数値に異常が認められないとしたら、どうでしょうか？

画像や数値で異常が認められない場合、まず、その他の原因を他の専門科で調べる為にあれこれと諸科を渡り歩くこととなります。それでも原因がわからない場合は、原因不明となります。

「病名は 。それに対する治療は 。」と設定されている以上、原因不明ということは分が悪いのですが、やむを得ません。こうした一連の検査が目指すもの。それは例外なく画像に現れた組織の変性、もしくは数値・検査値の異常です。

辛い症状があっても、はっきりとした異常が画像や数値として「突き止められる」時はよいのですが、往々にして異常が認められないということが現実には数多くあります。

それぞれの医学における

診断法の特徴と持分

西洋医学の進歩、それは人体の内部に入って探り、あるいは組織（血液、尿・・・）を外に取り出して、検査を微細に行うことに尽きます。

それに対して、東洋医学は人体内部の様子を人体の外表面に現れた範囲で探ろうとするものです。そこでは声調、声の大小、顔色、表情、動作、話し方、体臭、汗の具合、爪・皮膚の様子、大小便の様子、体温の偏り、髪、口唇、脈、飲食・・・等、あらん限りの外表面に現

サイン
れた情報をキャッチします。

このように、西洋医学の診断法と、東洋医学の診方は、似て非なるものと言えます。もちろん共通点も色々指摘できますが、多くの点で異なります。ここでは両者の優劣を挙げて言っているのではなく、それぞれの特徴と持分を分かり易く挙げてみました。

西洋医学は病名治療、東洋医学では病名は便宜上のもの

病院で検査に基づく診断をして、異常が見つかり、病名が決定された時は、それに応じた治療が開始されます。

先記しましたように、医療がその内容において目を見張る進歩を手中にしながらも、他方では相変わらず不十分のまま混迷しているという現実もあります。それは不定愁訴を筆頭とする、はっきりとした病名が付けられない、付けがたい症例が無数にあることによります。

東洋医学の治療は、例え患者さんが病院で立派な病名を付与されている場合でも、先ず東洋医学の診方で病態の把握をします。よほど進行が甚だしい病（末期癌など）は例外として、病名はあくまで参考に留めます。その時点でその患者さんの生体から読み取ることができる様々な情報を東洋医学の理論に基づいて分析し、即治療となります。

つまり、東洋医学の治療は病名がなくても不自由しない治療なのです。